

刑法

熊本が生んだ  
刑法学者

ゼミでは、話したくなるのを、  
じっとこらえて黙っています。



20名を超える学生数は、ゼミとしては大人数。司会から考える時間を与えられ、ディスカッションで盛り上がるゼミ室。



まじめに取り組む学生が多く、教育者として幸せと澁谷准教授。「いって言えばもっと野心を持って。それだけの実力はあるから」

学生主体、先生は脇役

「本件に関してはYの尊厳や国家の利益を損なったXの取材方法が正当性を欠くものだと考えます。」

「ありがとうございます。ほかに意見は？」  
「Xとの関係はY自身の意思で決定できたはずなので、Xの行為がYの人格を蹂躪したとは言えないのでは？」

この日のテーマは、『違法性』の理解。自分の理解には欠点やデメリットがないか



「丁寧に分かりやすく、面白い、先生の刑法の講義を受けて、ぜひゼミも先生のもとでと思いました。ゼミの中で、先生がテーマの核だと考えていらっしゃる部分とずれてしまうこともあります。みんなで活発な議論を交わって考えを深めていきたいです。」  
3年生 北御門 晋作さん



「決着したことも自分の視点で疑ってみるとか、ゼミを通して物事を多面的にとらえられるようになりました。私はサークルに入らなくて先輩後輩の交流がなかったのですが、ゼミで先輩の面倒を見る経験ができたこともよかったです」  
4年生 江島 舞さん

を、実際の判例に対し個人の意見を重ねていくことで検討すること。ゼミ参加者は司会進行を含め3年生です。「学生が沈黙すると教員としてはしゃべりたくなるのですが、そこをこらえるのが私のスタイル。自由な意見を出してもらっただけでなく、意見が出ない時に司会がどう切り抜けるかも勉強です」と澁谷准教授。それでも、議論が止まると、「憲法で保障された表現の自由とYが損なったものだけを天秤にかけるのか、それとも、手段の相当性や社会通念なども考慮するのか、立脚する論点を明確にして」とアドバイス。澁谷准教授の言葉が風穴を開け、学生から新たな意見が出されていきます。



法学部 澁谷 洋平 准教授

熊本出身。熊本県立済々黴高等学校卒業後、熊本大学、熊大大学院を経て、熊本大学法学部准教授就任と、まさに熊本大学の生え抜きの先生。

論理的に考え  
結論に至る能力を培う

このゼミには、アドバイザーとして4年生も参加しています。「事前に、司会役にレジュメ作成や議論の進め方をアドバイスします」と4年生の江島舞さん。

「犯罪や刑罰に対しては感情に流されがちですが法学部生には、論理的・論理的に考え、双方の立場に立つて結論にいたる道筋を模索する能力が必要です。それは社会でも求められる能力だと思います。社会から求められる「論理的思考」をゼミで身に付けた学生たちは、法曹界や自治体、民間企業へと巣立っていきます。」